

2014.2.2 「死んでも生きる」 ヨハネによる福音書11:17~44

イエスは、最愛の友であるラザロの死に向き合う時、《涙を流された》。その涙は、《心に憤りを覚え、興奮して》感情をあらわにして、取り乱すようにして「泣いた」という意味になる。聖書の中で、イエスが泣いたのは、ルカ 19:41 に出てくるが、それは都エルサレムを眺めて思いにふける涙であった。その涙とは違う。それは、悲しみの余りに「わっと泣き出した」涙である。

《ラザロは墓に葬られてすでに四日もたっていた》とは、完全な死を現している。イエスは、その死を前にして《あなたの兄弟は復活する》と宣言する。マルタは、《終わりの日の復活の時に復活することは存じております》と復活信仰を告白するが、イエスは《わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる》と、今、目の前に立っているイエスこそが死で終わらない方であり、この方を信じるならば、たとえ死んでも生きるというのである。復活とは、死なないことではなく、たとえ死んでも、そこで新しくイエスと共に生きるということである。

私の神学部の同期に、妻を亡くし、また息子を亡くした者がいる。彼は息子のために追悼集を作った。その中から。「…しかし、どのように死んでいくかは大した問題ではないのです。なぜなら、キリストを信じる者はすべて神の懐へ導かれるからです。そして良介も神の懐に抱かれていると思います。…天国の神の元に召された良介に、神さまは『良介、少し早く呼びすぎてごめん。しかし、天国でもお前が急ぎ必要だったんだよ』とこう言われたのではないか、と思うのです。私を慰めてくれた、サラ・ストック作、植村正久訳の『天に一人を増しぬ』のある1節を紹介したいのです。…『家には一人減じたり／家には一人減じたり 楽しき団らんはやぶれたり／愛する顔 いつもの席に見えぬぞ悲しき／さあれ 天に一人を増しぬ 清められ救われ全うせられしもの一人を／その人は慰められん』

愛するものを天に送った悲しみ、喪失感は尽きない。しかし、この詩は天も地も一つであり、それは神の世界であることを教えて、慰めに満ちています。感謝であります。」

ラザロの物語は、死の悲しみを決して軽んじることなく、向き合うことの大切さと、しかし、「死んでも生きる」という希望が、イエス・キリストにおいて示されたということである。(神谷)